

授業ディベートの教育的意味

授業ディベートの特徴

授業で行うディベートには、様々な特徴があります。ディスカッションと比べると、ディベートは窮屈に感じる人がいるかもしれません。しかし、その特徴にはそれぞれ教育的な意味があります。

(1) 論題が決まっている

例えば、ディスカッションのテーマが「日本における児童英語教育について」とします。ディベートの論題を「日本は小学校から英語を教科として教えるべきである」とします。この2つを比べてみます。ディベートの論題のほうが議論すべき土俵がより明確に、しかも狭く設定されています。これにより、議論の効率性が高まります。

パネル・ディスカッションなどでは、その場の議論の流れに関係なく、事前に用意してきた意見を述べるだけの人がいます。その結果、意見がかみ合わなくなります。あるいは、話が大きく広がりすぎて収拾がつかなくなります。

ディベートの場合は、限られた時間の中で、この政策を導入したらどうなるのかということに絞って論じます。論題を採択することによって生じるメリットとデメリットに焦点を当てながら論じることになります。論題は、短い時間で効率よく議論するために必要なものです。

(2) 立場が決まっている

ディベートは最初から立場が決まっており、その最中にその立場を変えることはできません。白黒の議論だけでなく灰色の部分もあると思うこともあるかもしれません。しかし、二分法で考えることによって、論理的思考を鍛えることができるようになります。立場を決めているのは、意見を論理的に構築させるための教育上のしかけなのと言えます。

ディベートでは、ディベーターがとる肯定か否定かという立場そのものよりも、なぜ肯定、否定という結論に至るのかという理由や根拠あるいはプロセスを重要視しています。ディベートは、シミュレーションであると考えればよいでしょう。肯定側に立った場合にはこういう議論、否定側に立った場合にはこういう議論ができるといった気持ちで議論するわけです。

(3) 話す時間に制限がある

時間が決まっているのは、だらだらとした議論展開を排し、問題の核心を捉えた議論をさせるためです。時間内に収めるために、余計な言葉をそぎ落とすことが必要になります。

(4) 話す順序が決まっている

ディベートでは、話をする順序が決まっています。質疑応答のとき以外は、ひとりの人が話し、他の人は聞いています。話す順番が決まっているのは、参加者に公平な時間を与え、議論の効率性を高めるために有効です。物静かな人もちゃんと話ができる時間を与えられるので、無理に声を荒げて話をする必要はありません。

(5) 根拠を重要視する

ディベートでは、根拠となる証拠資料などを使って自分の考えが正しいということを証明することが期待されています。証明の質の違いが勝敗を分けます。なぜなら、ディベートにおいては議論の質を重要視するからです。議論は直観に基づいた個人的な考えだけでは説得力をもちません。その根拠となる理由付けや証拠資料を提示することによって、自分の考えが正しいことを証明しなくてはなりません。したがって、ディベートの準備段階では、的確な情報を収集し、ディベートで使えるように整理することが繰り返し行われます。